

「ダンボール方式改良版」で実践中

～下代継の木住野さん～

ごみ会議の方々に「ダンボール方式の生ごみ減量法」を教えていただいてから、2年が経ちました。1日1回混ぜるだけで、自分のペースで手軽にできて良いのですが、生ごみを入れていくうちにゴミの水分で、ダンボールの底がぬけてしまい、新しいものと交換するということを何度か繰り返してきました。そのたびに使い終わったダンボールが資源ごみにも出せず、大きなごみになってしまい悩んでいたところ、テレビで「スウェーデン方式」というものを紹介していたのです。これは、全くダンボール方式と同じ減量法ですが、そのスウェーデン人は、ペランダに大きなドラム缶を置き、その中に生ごみを入れ、ドリルのようなもので1～2回攪拌するというやり方でした。私はさっそく知人から一斗缶を譲ってもらい試してみました。さらにポリバケツでも試してみました。通気性を考えると少し不安でしたが、1ヶ月、3ヶ月、遂に1年経ちましたが、ごみ床はいたって良好です。しかし、今年になり一斗缶の方は下が腐ってきて穴があいてきました。ポリバケツの方はいたって順調です。ふたをしておけば外に出しておいても虫が入ったり、雨にぬれたりする心配がありません。

私は肥料に使っていませんので、このごみ床は、ポリバケツが壊れるまで使えると思います。皆さんも是非試してください。

ポリバケツに移すのは、微生物が活発になる1ヶ月後くらいが良いでしょう



第4回マイバック持参キャンペーン

本年度で4回目のキャンペーンは、例年のように秋留台高校の生徒にも協力してもらい、新たに二つの試みを追加して6月17・24日に実施しました。

- 1. キャンペーン実施店舗の拡大**
従来5店舗(あきる野とうきゅう、スーパーアルプス、パーク二宮店、いなげや雨間店、オザム秋川店)に加え、いなげや新草花店、オザム代継店の7店舗で実施。
- 2. 「いずみの会」の協力**
今回は、「いずみの会」のメンバーにお願いしご協力いただきました。特にあきる野とうきゅうでは「風呂敷コーナー」を設置、風呂敷を買い物袋に活用する方法を実演し、40人近いお客さんにPRし好評を得ました。

当会で調べた今回のマイバック持参率は39%で、昨年調査の26%より13%向上しており、市民の皆さんの意識が確実に向上していることがわかりました。(K.O)



あきる野ごみ会議の活動もまもなく4年が経過し、「へらすぞう」も第10号まで発行することができました。この11月に改選時期となり、現在、一緒に活動していただける方を募集していますので、ご協力いただける方は、是非、ご応募ください。(詳細は、9/15号広報に掲載)

さて、右の写真は「燃やせないごみ」として出されたものですが、スプレー缶や乾電池・ライター等の「有害ごみ」が混ざっています。このごみ原因で収集車の中で火災を起こしてしまいました。幸い、大事には至りませんでしたが、一歩間違えれば大惨事です。ごみの分別は一人一人のモラルにかかっています。排出者は、責任を持ってごみの分別に取り組んでほしいものです。(T.H)



ごみ情報誌

発行・編集 あきる野ごみ会議

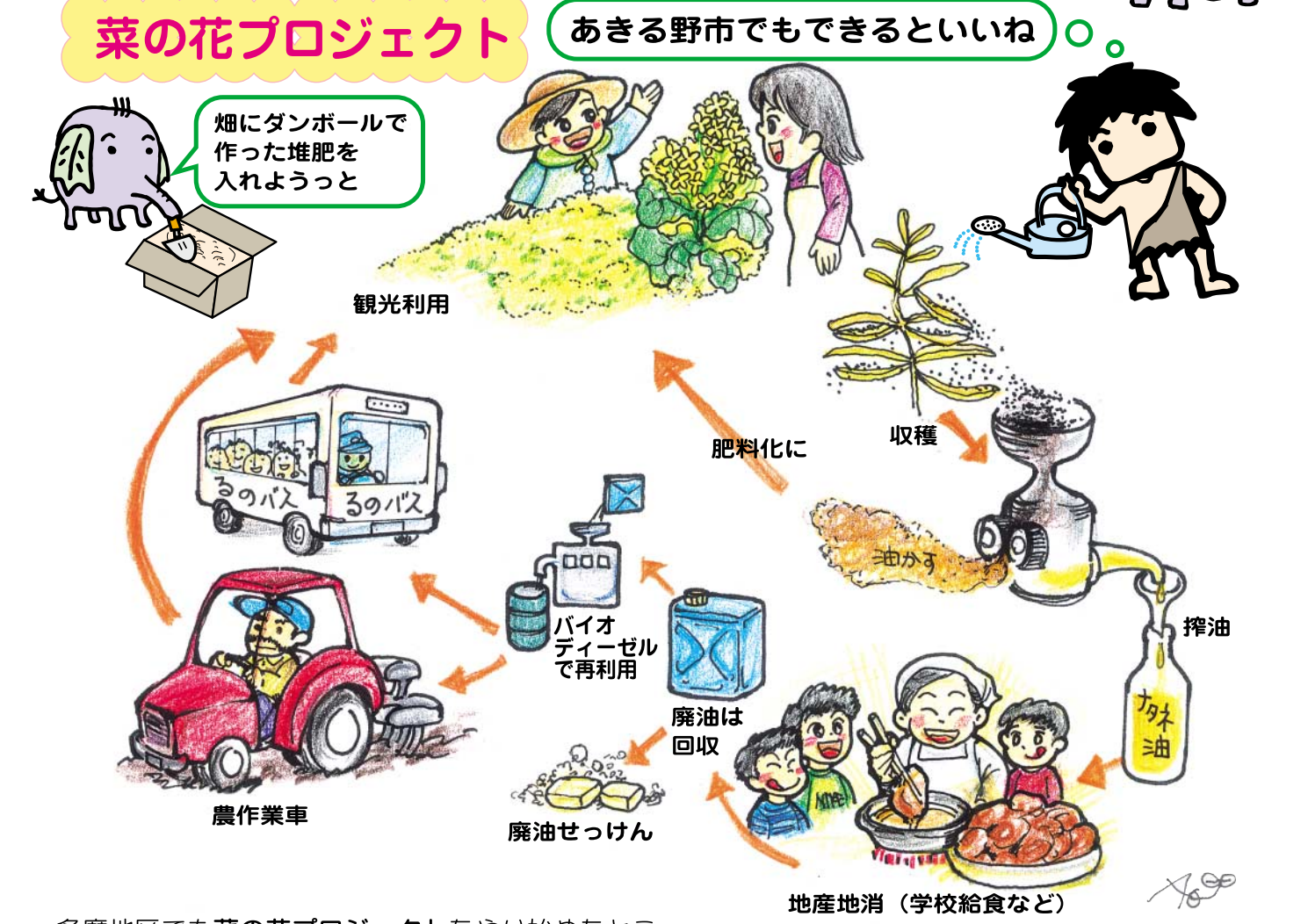
へらすぞう

第10号 2008年9月

げん人くん

へらすゾウ

あきる野ごみ会議は、市民・事業者・市の3者が協力して活動している団体です。



多摩地区でも菜の花プロジェクトをやり始めたところがあります。小平市です。「ごみ会議」メンバーも5月29日、小平市に見学に行きました。

小平市は昨年3月「都市農業基本構想」を市民参加で改訂。これをもとに、農地を残し活用したい市の産業振興課の熱意と、地域住民(「小平環境の会」や「東大農場塾」のメンバーなど)の積極的提案、農地を利用しきれない農家の、3者の思いが合致。

2007年9月、市の呼びかけで参加者募集。説明会を経て10月種まき、2008年6月収穫(収穫後ひまわりの種まき)7月搾油(500坪の農地から60ℓ余りの菜種油がとれました)→市のイベントで食用油として販売予定。

その後、市内の廃食油も集め、車の燃料にしたいと考えて現在検討中とのこと。今後の活動が楽しみです。(M.T)

菜の花プロジェクトとは

地域でできる資源(菜の花など)を利用して、エネルギーに変え、それを地域内で利用する、資源循環型の地域づくりをめざすもの。

1970年代、琵琶湖の水質悪化を守るため、滋賀県で始まった。廃食油を回収し、石鹼にリサイクルする運動が発端。

現在、全国的に運動が展開され、ネットワークもできている。

菜の花の場合、食用油として使った後廃油をBDF(バイオディーゼル燃料)に変え、大気中のCO2が増えない車の燃料として利用する、という循環になる。

ごみのゆくえ（資源）

今回はペットボトル・びんを取り上げました

キャップは
はずして
燃やせない
ごみ

キャップは
はずして

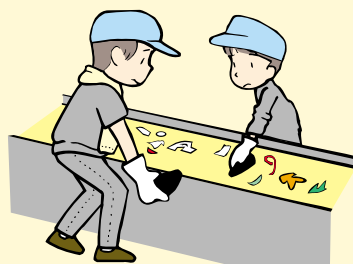
ペットボトル



西秋川衛生組合（高尾清掃センター）



圧縮梱包機にかけて



手作業で分別



ワンウェイびん
（使い捨て）



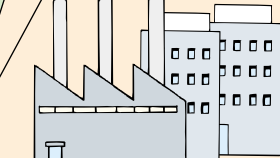
リターナブルびん
（繰り返し使う）



ペットボトルのキャップ

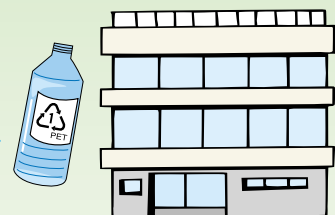
市のルールでは燃やせないごみですが、最近資源としてキャップを回収し売却益を「世界の子どもにワクチンを日本委員会（JVC）」を通じて、ワクチンや医療物資等に役立てようという取り組みが盛り上がり「あきる野とうきゅう」ではキャップの回収を行っています。

なお、市役所本庁舎でも回収し、「あきる野とうきゅう」の回収ルートを利用しています。

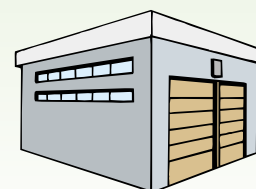


ペットボトル
製造工場

選別・粉碎・洗浄された後に精製され、ペットボトルの原料となり新しい材料と混合され、ペットボトルに再生される。（一部はYシャツやユニホームなどの衣料材料になる）



リサイクル協会



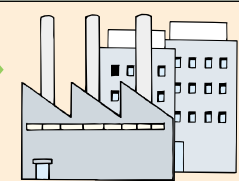
空ビン問屋

ワンウェイびん

色別に分けられ、ガラスびんに再生される。（一部はカラー舗装などの道路材料になる）

リターナブルびん

洗浄され再利用される。



ビン製造工場

飲料メーカー

（H.M）

スーパーのトレイ等の再利用の一例

店頭にて回収



買物のお客さんが持参

リサイクル事業所へ搬送



石炭代替燃料に加工（RPF）

廃プラスチック（トレイ、レジ袋、発砲スチロールなど）と紙くず、木くずを粉碎し整形加工する

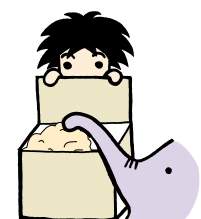


石炭の代替燃料として製紙会社へ販売

- ・石炭、コークスと同等のエネルギー発生
- ・不純物混入少なくダイオキシンの心配殆ど不要
- ・CO2排出量を石炭の1.5倍削減、灰化率石炭の1/3以下（埋立て残渣の低減）
- ・1トン当たりコスト約3千円（石炭の約1/3）



（S.M）



ダンボール方式の普及に取り組んでいます

ごみ会議は足掛け4年、生ごみをごみとして収集・焼却せず、各家庭で土に返していくためにダンボール方式（ダンボールの中にビートモスともみ殻くん炭を混ぜて入れ、そこに生ごみを投入する方法）の普及に努めてきました。それをさらに発展させるため、このたび、市が基材がセットになった「ダンポスト」を300個購入し、市民の間に広めていくことになりました。そのために次のことを実践しました。

- (1)5月24日に行われたリサイクルフェア会場で、3回のダンポストの講習会を行い、実践してくれるという人に無料で配付しました。80人を越える人が説明を聞き、67人が挑戦してくれることになりました。
- (2)6月2日の一斉清掃の後、原小宮町内会ではごみ会議の会員を講師に呼び、ダンポストの説明会を開きました。約30人が参加し、22人が実践してくれることになり、ダンポストを無料配付しました。
- (3)8月24日、市役所コミュニティホールで応募者50人余りに説明し配付しました。

今後も普及に努めます。あなたもぜひやってみてください。（Y.S）



原小宮町内会・ダンポスト講習会